
異世界少年

バード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界少年

【Nコード】

N2595W

【作者名】

バード

【あらすじ】

とてつもないチート能力もった主人公が圧倒的に無双するはなしです。

R15はとりあえずといったものなので消えるかも知れません。

空中落下（前書き）

初書です。これからよろしくおねがいます

空中落下

俺、尾崎秀一はとても元気な中学生だ！

スポーツなんてお手のもの、女子にもモテモテさ！ … いや、だつたというほうがいいか！ なんせいまおれは

「高度5000m位からまつさかさまにパラシュートなしで独りで落ちてるんだもんなあ！」

このおれが落ちている理由は3時間ほどさかのぼる…

学校から友達とかえってたら急に達が疾走し始めた。学校へ。忘れ物かなとまえむいた瞬間体中に衝撃が走る。顔をあげたらおっさんの顔。そして下みたら、おっさんがおれをナイフで刺していた…

… そして自分気絶して出血多量に死亡… そのあとがいたらなぜか俺は真っ白な空間にいた…

空中落下（後書き）

死因？題、修正しました。
意見まっています。

テンプレ的な白い空間（前書き）

投稿はとてつもないほど不定期で文章少ないです…そこんとこ了承の上でお読み願います。

テンプレ的な白い空間

「…ここどこ？」

気がついたら白い空間の中

これってテンプレ的な？

神出て来たりしませんよね？

「それが出てくるんだもんねー」

…は？

「は？とかいくら神でも傷つきますよ？」

おれの目の前にいるのは小4ぐらいの背丈の少年。

いや、こんなの神だったら驚くдар。

「そんなのはないよ。んで取りあえず本題に入るよ。これからきみには異世界にいつてもらう。」

「え？何故元の世界じゃないんだ？」

「自分が死んだこと覚えてないの？」

ああ、そうだ思い出した。通り魔にあつたんだ。んで心臓をサクリツと殺ら…れ…た？

「そう、一度死んだら元の世界に戻るには

記憶や姿など全て捨てて赤ん坊から転生するしかない。まず普通の人なら自動でそのままこの手段で転生されることになる」

「なら神に会ってる俺は特別か」

「うん。ぼくの手違いで死んだからね」

サラリと言ってくれるじゃねーか

「言わなくてもいつしよだからね。まあそれで異世界へ転生させるということ」

「なる程」

「んでお約束の能力？特典」

「まってました！」

「やっぱり叫ばずにはいられない。」

「うん。んで特典から先言つよ。ひとつめぼくといつでも話せるようになる。ゴッドチャットと念じればいつでも出るよ」

「そのままだな。まずいつでも出れるほど神は暇なのか？」

「うっさい。特典1つ減らすぞ」

「すみません」

「とりあえず平謝り。だいじなものだったなら難儀だし。」

「よろしい。2つめ、MP、ギルドと一体化」

「ギルドと？」

「つまりギルドレベル上げればMPも上がるということになるほどなるほど」

「んで能力1つだが強い」

「それはなんだ？」

「魔法全部つかえるとか？」

「そんな願望は次の言葉で叶えられた。」

「思ったことが実現または思った事をする事ができる
なんじゃこのチートぶりは！！！」

「ただし、チートすぎなぶんリスク？デメリットがある」

「そりゃそうだな」

「どなんだ？」

「1つ、MPを実現したと同じぐらい消費する」
「そりゃしかたがない」

「2つ、出来事は実現出来ない」

「当たり前だな。できたら世界崩壊される。」

「3つ、人を一発でたおす魔法とか、金を作ったりすることはできない」

「これも元々する気無い」

「んで？」

「以上！異世界逝ってらっしゃーい！！」

なんか何気なく字が違う!と、思ったら、
パカッ

床が開いた。

え？

「うそーーーーーん!!!!」

まあ、そのまま落ちていった訳ですよ。

テンプレ的な白い空間（後書き）

つまんないこと前提で読んでやってくださいw

チート練習1

「まずは落下をとめよう。後はそれからだ」

ということで俺は、飛べる魔法を使ってみることにした。

「やっぱ飛ぶなら風だな」

とりあえず強い上昇気流をだして浮かぶことにした。

シユン、ボオオオオオッ！

一瞬体から何かが抜ける感じがすると同時に下から物凄い風が吹いてきた。

その風は、俺の落下を止め、ゆっくりと俺をおろしていく。

「。〒# >\$¢^±# ！？」

一方その俺はかぜのせいで喋れなかった。

(次は加減をしよう…)

そう心にちかう秀一であつた…

それから3分くらいして俺は草原に着陸した。

「よし、このチート技練習しよう」

そういつて始めようとした時間き覚えのある声が頭に響いた。

…あのチビ神だ。

「チビは酷いよ！チビは！！」

本当のことだもん。んで、用件は？

「本当のことって… まあいい。んで用件ね。言えはこの世界での注意点」

ああ、そついや聞いてなかったな。んでどんなだ？

「1つ、技の名前ぐらいは使うとき言つてね。この世界で無詠称するとあやしまれて最悪捕まるから。捕まっただとしてもぬけるだろうけどきをつけて」

面倒事きらいだしきを付けよう。

「2つ。一気にレベル上げないで。他の人の目につくから。そして

最後、後ろ敵いるよ？」

「なっ！」とうしろむいたらでっかいキノコがいることにきずくまでかからなかった。 … 何時の間にか通信きれてる。あの臆病者め。まあ、まずは…

「こっちを殺りますか！」

キノコVS秀一の戦いはじまった。

チート練習1（後書き）

DSIでうつてるひとつてほかいるかな？いたら一言コメントくだ
さい！

誤字修正しました

チート練習2（実戦）（前書き）

即、決着します。

チート練習2（実戦）

このキノコの化け物はハラブというらしい。何故分かったかは、少し、「名前なになー」とか思ったら勝手に出てきた。まあ便利だしいいけど。

とりあえず前のキノコをどうしようか。

一応植物だし焼いてみるか。

「ファイヤー！！」

ゴオオオオオオオオオオオオオオ！！

あ、強くなりすぎた。

「グギシャー！！！！」

ハラブは一瞬にして消し炭になった。

ゴミのようだ！

そうおもっていたら急に炭がきえた。

そして消えたとどうじに黄色い粉がすこしはいった袋が落ちた。

「モンスターを倒したらドロップアイテムが出るのか。剥ぎ取らないでいいいいいな」

とりあえずその袋のなかの粉を舐めてみる。なにかしらべるために。

：

：

結果、痺れ粉でした

というかまずさわった時から痺れてたし薄々きがついてたけど。

取りあえずこれはもっておく。鍊金すれば武器になるかもしれないし、無理でも近くの町で売れるだろう。

というかまず町いかと始まらないし行くか！

チート練習2（実戦）（後書き）

歩いてる最中の話は2〜3話になると思います。

錬金しよう！

さっきいた場所から5km位歩いた所で日が暮れた。

ここまで来るのに20体程モンスターが来たが、残らず燃やした。

なかにはノツポとかいう木の化け物もいたがぶっぱなした。ドロツプアイテムは蜜や木の枝とか、ちなみに全て頂いた。木の枝なんか見かけの割に耐久力がつよいもん。

そんなこんな合って今は夜。テントを作り出して張って、光の魔法で周りを照らし障壁を張った。

「完全防御一丁上がり♪」

これでこちらのモンスターは襲ってこれないだろう。

さて、いまからしたいことがある。それは、錬金術だ。

材料も集まったしやって

みようと思う。

「まずは剣だな」

秀一はまだ武器をもっていないので剣を作ることにした。

「材料は木の枝と痺れ粉でいいかな？」

そういつて秀一は痺れ粉と木の枝に触れた。すると、

バチッ！バチバチバチ！

火花がちり同時に一本の剣が出てきた。そして、

>電木刀が出来ました<

どこからともなくそんなメッセージが出てきた。というか「誰だよ

！」って突っ込みたい。

そこはおいといて、この木刀、たしかにすごい。なんと刀に触れると痺れるのだ。意外に凄いとおもう。

今日はこれ位にして寝た。

錬金しよう！（後書き）

W
アップして見ました。

乱入試合（前書き）

また、一瞬。そして、短いです。

乱入試合

朝になり、すぐに気づいた事。

[illegible]

でもドロップアイテムの蜜があつたので喰う。

「おえ~~~~~」

…まず過ぎた。

でも案外腹一杯になるしいつか。

それから10分後:

1 kmほど走っているが……ちよいとやりすぎたか。

前には粉々になったモンスター（ゴミ）と、横には啞然とした少年がいる。

なぜこうなったかは見当がつかずとおもったが30秒ほどさかのぼる。

俺が疾走していたときのこと……

ダダダダダダダダダダダダダッ！！

俺は忍者よりも速く走っていた。

「あゝ暇だゝなんかねえかな」

そんなことをいつていると人影が見えたので、話しかけようとしてその人の状況を知った。

そいつはボロボロで所々に切り傷があり、それに付け加えるモンスターにかこまれている所だった。

話を聞きたかった。なので面倒だが助けることにした。

…それから言わずともわかるまい。

まあとりあえず…

「おい、きこえてるかー？」

少年から話を聞く事にした。

この世界の事（前書き）

仲間が増えます。

この世界の事

あれから5分：

呼びかけている内に少年が怯え始めた。

…何故に？

10分：

イラついてきた。

まだ口を開けない。

20分：

「おい」

「……」

相変わらず無口な少年。

30分、40分、50分、

「話を聞かせて貰えないかな？」

「……」

プチッ

「話を聞かせろつつつてんだろ糞ガキがあああああ……！」
そう叫ぶと同時に木刀をふりかぶる。

「わあっ！分かりました！話しますから武器を下ろして……！」

「最初からそうすればいいじゃん」

俺は武器を下ろして質問を始めた。

∴
∴
∴
∴

少年の話に寄ると、この先の国は王がいる王国でイスグラルという国で、とても治安が良く犯罪が起こったことがないらしい。そして他の国とも戦争が起こった事もないらしい。

∴ まさに平和な国だな。

んで自分は奴隷商人に売られる所でモンスターに見つかりおとりとして馬車から放りだされたのだと。

それともう先に俺が異世界からきたことは話してある。最初はそれこそ信じて貰えなかったがそのらの実を拾って錬金の応用で一瞬で回復薬作ってやつたり、酸素だけを圧縮して酸素玉を作ったりして人外過ぎる技をみしたら信じて貰えた。まあ信じて貰えないならあの子ビ神をだすまでだが。

んでいまだが∴

少年に追っかけまわされてる状態。

少年曰わく帰ってもすむところがなくてモンスターを一瞬で叩き潰した俺に仲間にして貰いたいんだと。

んで今に至る。

んでこの少年が怖いのよ。

ビツシャアアアン！！！！

雷の魔法をうちまくってくるのよ。しかも威力が強くてさっき背中にかすったがかすったところから徐々に焦げ始めたんだ。

そこは水で止めたけどまともに当たったら

ひとたまりもない。とりあえずここは折れてやって止めるか。

「分かった！分かつてビツシャアアアアン！から止めてビツシヤアアアン！」

「えっ本当ですか！？ありがとうございます！」

よう聞き取れたな。

「僕はアルム、アルム」アランといいます。宜しくお願いします！」

「こっちは尾崎秀一、秀一で、宜しく」

こうしてすこしづぎみな少年が仲間に入った。

11の世界の事（後書き）

つぎで王国に着きます。

王国イースゲラル

あれから10分ぐらいして2人はイースゲラルに着いた。

アラン曰わくこの国は人口が2000万人ほどで商業がさかんだという。またギルドもあり、冒険者も多いそうだ。

「さて、まずはギルドに行きますか！」

「そうですねお金を稼ぐにはそれが一番ですし。なにより秀一は冒険者じゃないですしね」

「?ということはアランは冒険者？」

「はい、一応ですからギルドのことも分かりますが先に説明しましょうか？」

「お願いします」

：

：

：

：

：

アランによるとギルドこの世界にいくつもあり、ランク制になっていGからF、E、C、B、A、A A、A A A、S、S S、S S Sになっでいて、クエストをこなすとあがつていくんだと。ただしクエストでの責任は全て自己責任で、クエストに失敗した場合は報酬金の1割を払うのが原則なんだって。

クエストの種類は主にモンスターを討伐する討伐クエスト、指定された物を取ってくる採取クエスト、護衛対象を護衛する護衛クエストの3種類で3つまでなら一度に受けることができ、自分がつくったり取ったりしたアイテムやモンスターがおとしたりしたアイテムは買い取ってくれんだと。

まさに万能だなギルド。

「それではいきましょうか」

「ああ、いこうか」

そして秀一はアランの手を掴み…

「ワープ！」

秀一は話をしているうちに千里眼を使いギルドの場所を把握していたのだ。

「え？」

シユン

秀一達は一瞬でてそのばから消え、ギルドの前に姿を現した。

「よし、OK、行くか！」

「えええ！なんでギルドの前に！？」

「おーいいくぞー」

「まあいつか、どうせ人外なのはわかってますし」

…

…

…

ギルドのなかは見かけの割にひろいところだった。

「アラン、登録はどこですか？」

「その2番の所です。行ってらっしゃーい…といたいとこです登録にはお金がかかるので…なにか売れるものはありますか？」

「うーん、んじゃあ回復薬を売ってくるよ」

「わかりました。売るなら3番ですよ」

「分かった。いってくる」

秀一は3番のところに歩いていった。

「すみませーん、これ作ったものですが売れますか？」

そついつて秀一がだしたのは4つの球体。

「はいはい、この薬ですね。何薬ですか？」

「回復薬です」

「わかりました。ではすみませんが試し飲みとして一つ頂きますがよろしいですか？」

「わかりましたいいですよ」

「はい、では少々おまちください」

∴

∴

∴

1 分後∴

「お待たせしました。3 つで150 イルになりますが宜しいですか？」

さきのアランにきいておいたんだが、銅貨一枚10 イルで、銀貨が一枚100 イル、金貨

が一枚1000 イルで、白銅貨一枚10000 イルで宿屋が一泊50 リルのところからみると1 リル〃100 円の計算になる。

だから150 リルは1500 ∴ 0 円の∴ 計算に？

「そんなに効力が強かったのか！？」

「はい、大怪我をしていた人に食べさせて見れば傷があつという間に塞がりました！」

「そうか∴ 分かった！これでいい」

「はい、では150 リルになります。ご利用有り難う御座いました！」

俺は150 リルを持ちアランのところに行った。

「何リルでうれましたか？」

「∴ 3 こで150 リル。大怪我の人が飲んで一瞬で治ったそうだ」

「ハアー∴ 本当にあなたは人ですか？」

「人だよ！！」

「そうですか∴ 取りあえず、

今日はおそいですし宿をとりましたよう」

「そうだな」

とても呆れられた。何故だ？

∴

∴

：

5分程歩いて「暮連」と看板にかかれた宿についた。

「アラン、宿って長期滞在とかできる？」

「できますがどうしてですか？」

「しばらくはこの国にいるつもりだし」

「わかりました」

そうして俺達は宿に入っていった。

「おや、いらつしゃい。宿泊かい？それとも食事だけかい？」

「宿泊で、あのう長期滞在できますか？」

「できるよ。それなら1日2食付きで一泊30リルだよ」

「じゃあまずは4日で120リルで」

秀一は女将さんに120リルを渡した。

「毎度！部屋はこのさきの103号室だよこれはカギだよ。んで食事は2回までなら言ってくれば作るよ。ただし3かいいいじょう食べる時はお金がいるからね」

「分かりました。では早速夕食二人前お願いしまゝす」

「あいよ！」

まずは夕食を食べることにした。

王国イースゲラル（後書き）

次はクエスト行けるかな？

錬金しよう! 2 (前書き)

錬金を沢山します。

錬金しよう！2

夕食を食べた後俺たちは部屋にはいった。

部屋は個室だが広く、ベッドが2つおいてあってとてもゆったりと出来る造りになっていた。

「アラン、いまから錬金をするけどみるか？」

「錬金？」

「そう、物と物を組み合わせて武器とか道具を作るんだ」

「鍛冶と似たような物ですか？」

「うーん、まあそんな感じ。それを俺は手しか使わずにやる」

「鍛冶を手だけですか…すこし見してください」

「んじゃ実験として空気でやってみようか」

「空気はできないでしょう？」

「それが出来るのさっ！えいっ！」

秀一は何も無い所にてをだして魔力を出した。するとてを出した所に白い翼が浮かんでいた。

「えええっ！ほんとにできちゃってる！」

「…んでこの翼はライトウイングといってすこしの間空を飛べる物だ」

「へえー少し使わせて貰っていいですか？」

「いいよ。んじゃ背中に翼を着けて」

「こうですか？」

アランの背中に翼がつけられる。

「いいよ！じゃあ背中に力を入れてジャンプして！」

「こうですかっ！」

アランがジャンプすると同時に翼が光り動き出す。

「わ！わっ！飛んでる！本当に飛んでる…！」

「おお、一発で成功させたかうまいねえ。でももうそろそろ降りた

方がいいよ?」

「なんでですか?」

「だから…もうおそかったか」

「なにが…ワッ!」

アランが頭から落ちた。

「う」

「これは試作品、短時間で効果が切れて消えるんだ」

「先に言ってくださいよ!」

「ごめんごめん余りにもはしゃいでいたから」

「~~~~っ!!」

「とりあえず続きやるぞー」

「次は何を作るんですか?」

頭にでつかいタンコブをこしらえたアランがいった。

「次?次はアランの武器」

「いいんですか?」

「いいのいいの、んでまずここからすきなものを選んで」

そう言つて秀一は鉄くずと木の棒をだした。

「んじゃ鉄で」

「わかった、次はここから選んで」

そういつてだしたのは、麻痺袋、水袋、火炎袋、色の付いた石を5

つほどだした。

「このいしは魔石ですね」

「魔石?」

「はい、中に各属性の魔力が込められています」

「なるほど、んでどれにする?」

「この電気の魔力が込められた黄色い魔石にします」

「よし、んじゃそれ貸して」

「?」

アランは不思議に思いながら魔石を返す。

「んじゃいつくよー」

バチバチバチバチ！

火花が散りそれから一本の剣が出てきた。

> 電仁刀が出来ました<

というメッセージと一緒に。

そしてこの刀のステータスをみてみた。

電仁刀

威力150

切れ味100

属性 電気

魔法 1・エレクトリック 2・エレキボール

魔法が込められているみたいだ…

とりあえずアランに聞こう。

「アランー剣ができたんだが…武器に魔法が込められているということはよくあるのか？」

「ありますよ。魔石を使えば100%付きますよ、何という技ですか？」

「エレクトリックとエレキボールというんだが…」

「聞いた事がありませんね…使って見ますそう言ってアランは窓を開ける。そして剣をななめ上に上げて「エレクトリック！」と叫ぶ。すると剣が光って電気をまとい始めた。

そして3分位してようやく帯電が消えた。

続いて「エレキボール」と唱える。すると剣先から握り拳の一回り大きい位のサイズの電気の球が発射された。

結果 大成功

ほかには鉄と火炎袋で火炎剣も作った。火炎剣を装備し、電木剣はうることに。

他にはムミの実と蜜で携帯食を作ったり（味はない。無味だもん）酸素玉を10こつくったり…

今日作った物←箇条書き

携帯食×3

ライトウイング（試作品）×20

酸素玉×10

火炎剣×1

電仁刀×1

水流刀×1

HP回復薬×10

MP回復薬×5

こんなもんですな。

これで残りの材料は…

木の枝×3

麻痺袋×2

火炎袋×1

魔石×4

空気？酸素×∞（これからは省略）

石ころ×5

こんぐらいですな

「さて材料ねーしもう寝るか」

「いいですけど…研石忘れてますよ？」

「ああ、そうだそうだ忘れてた。作ってか

ら寝よう」

それから研ぎ石を作ってから俺はある実験を始めた。

「なにしてるんですか？」

「切れ味が0になったらどうなるかの実験」

「へーえ、でもどこを斬るんですか？」

「透明な障壁で作ったかかしに色を塗ったもの」

障壁をかかしの形にしてそこにペインの実を付けた物だ。

「よし、それじゃあ行ってみよう！」

ガンッゴンッギンッゴンッギンッガンッ

「90…80…70…60…」

切れ味が障壁を斬るたびにへっ
ていく。
「30…20…10…0！」

錬金しよう！2（後書き）

ポキリ…

切れ味が0になると剣が折れた。

「うわーこりや気を付けなきゃだめだね」

「研石がなきゃ武器が壊れる所だったでしょう？」

「ああ、そうだな。でももうそろそろ寝ないか？」

「そうですね、寝ますか」

そうして2人は寝た。

次こそギルドです！

いざ、クエストへ！（前書き）

この小説が短い訳は活動報告にあります。
正直言ってつらいです。

いざ、クエストへ！

「うし！登録終了！」

「お疲れ様です、これからクエスト行きますか？」

「行こうか、金が無いし」

さて…ここまでの経緯を順番に言おう。

1、朝、（昼）

二人揃って寝坊！！急いでワープしてギルドへ。

ちなみに朝ご飯は携帯食料ですませた。すぐに食べれて腹も少しは膨れるしね。

2・ギルド到着、中に入って手続きを始める。

んで手続きしててわかった事、この国の言語が日本語とそっくりで横文字や漢字もあったのでとても助かった。もし違ったら字を読んでもらうという羞恥プレイになる所だった。

3・ギルドのルールを教えられそうになった。

あのままいつてたら2時間は軽く話してそうだ。あらかじめアランにきいていてよかったと本当に思う。

4・水晶が出てきて血を要求された。

んで腕を少しはりで刺して血を垂らしたら

水晶が光り始めた。そして水晶の中にBの文字が浮かび上がってきた。聞いてみるとこれは最初のランクを調べるもので調べたい人の血を垂らすとそのひとのランクが分かるんだと。

そうしてギルドのとうろくは終わり。らくでしたー！

んで今だが…

アランと一緒にクエストを選んでいるところで、ちなみにアランのランクはCなんだと。近いランクで良かった。

「秀一！これどうですか？」

そういつてアランが指差していたのは

A級討伐クエスト

討伐対象：アクアドラゴン

報酬：銀貨50枚

報酬も申し分ないしこれでいいか。

「うん、まあいいんじゃない？」

「ではこれにしましょう！」

そうして二人はクエスト受注のため4番の窓口に向かった。

「えーと、このクエストを受注したいのですが？」

「はい、アクアドラゴン討伐ですね。ではこの腕輪をお付けください」

「これは？」

「その腕輪は真実の腕輪といいまして、クエスト中なにを討伐したかを自動で記録してくれる優れ物です」

まあモンスター倒したらアイテムになるし複製される可能性があるからな。

「分かった」

「はい、アクアドラゴンはルータル草原にいます。ご武運をお祈ります」

そうして窓口の人に営業スマイルで送られたあと俺達はすぐには草原にいかず武器を揃えに武器屋に来た。

「らっしやい！ここはお前らみたいなチビなお子様がくるとこじゃないぜ？とつと家どころんとしとkメキイイイ！、ギヤヤヤアアアアアアアアアア！」

そう、俺、尾崎秀一はチビとかお子様とかいわれるのはとてもタブーなのだ。前の世界でも「やーいチビ」とかいう奴殴って病院送りにしたもんなあ……

「おら！このジジイ！！今言った事を撤回しろ！！」

「ひっ、ひいひい！わ、分かりました！！撤回しますのでど、どっ、どうか、こ、こ、殺さないで！！！」

めっちゃ怯えてる。まあ許したるか。

「分かりやいいんだ」

「す、すみませんでした!!」

「ただし次言ったらそのときは…分かっているよな？」

カクカクカクカク

店員はロボットののように凄い勢いで首を縦にふる。余程怖かったんだろう、しっこびってやがる。

「よろしい。さて、アラン、武器なんか買おうぜ」

「そ…そうですね」

あれ？なんでアランが怯えてるのかな？

「あの…」

「なんだ？」

「秀一って元の世界でもこんな性格だったんですか？」

アランが微妙にふるえながらきいてくる。

「ん？まったくおなじ。いつてきた奴は3秒でみんな気絶させた」

「……………」

さらに怯えられた。酷い…

きを取り直して。武器をかうことにした。

俺は買う必要はないけどデザインの参考に。（鍊金ですぐ作れるしね）

後は……

「ここに金属の余りとかくず鉄はないか？」

「ひゃっ、あ、あります。…が何に使うんですか？」

かなりびくつちゃってるわ。だめだ、こいつ。

「それは内緒、金がかかってもいいから全部くれ！」

「分かった、じゃあ少し買っててくれ」

元の態度に戻った。流石は武器屋の店員。

ドッスン!!

それから3分ぐらいしてカウンターに3つの木箱が積み上げられた。

「こつから銅、鉄、ミスリルとなるが？」

「よし、いくらだ？」

「この量だと銀貨5枚ぐらいが相場でしょうな」

「分かったそれでいい。後これからくず鉄がでたらいつてくれ、種類や量によつては高値で買い取るからな」

「分かった！まいど！！」

「秀一、これかっってください！」

そういつて出してきたのは一本の長剣。

「すまん、これも買う」

「おう、ああ、これなら一本銀貨15枚だがさっきの無礼もあるし一本12枚にまけてやろう」

「よし、それでかおう」

「毎度！！」

いざ、クエストへ！（後書き）

「おいアラン、次、次！」

「あつ、はい」

少しクエストいくまえに色々とよっとくか。
クエスト出発は少し掛かります。

装飾品屋へ！（前書き）

1つ1つかくのがとてもつらい。

HELP!!PC!

装飾品屋へ！

ダダダダダダ

土煙を出しながら秀一達が向かったさきは装飾屋。

ズザアアアアアアア

盛大な土煙と音を出して秀一達は止まった。

「よーっと、ここが装飾屋か？」

「っと、はいそうです。ですがなにを？お金あるんですか？」

「あるぞ。ほらよ」

ジャラン

秀一は銅貨がどっさり入った袋をアランに放り投げた。

「わっ！わわっ！これは！？」

「銅貨がそんなか1000枚程はいつてるからよ、すきないくらでもかってこい」

「1000枚！？こんなにいいんですか！？」

「余ったらくれてやるよ。その代わり買った物見せて」

この銅貨は錬金術で作った物なので秀一には実際、材料分は他の物作って売れば損失はないのだ。なのでこんな余裕をかましているのだ。

「わかりました！ではいつてきます！」

「行つてらっしゃーい」

アランは店のなかへはいつていった…

…

さて、秀一は

「よし！あれ作ってみるか！」

秀一はあるものをつくることにした。

「みられるとやばいし亜空間作って入って作る。アビス！」

ブーン！

秀逸が亜空間を想像すると秀一はそのばから消えた。

シュン

そして紫色の亜空間のなかに出現した。

「よしっやるか！」

バチィ！バチバチ！

ほんの一瞬でそれは出来上がった。

秀一の手の平にあったのはあの有名な青狸の時を止める道具

そう、タンマウォッチである。

「うし、出来たあ！早速つかってみよう」

そうして秀一は亜空間から出て元の場所に戻った

幸いそのときには人はいなかったのでみられることはなかった。

「よしっつかうぞー、時よ止まれ！」

カチッ

ジュワーン

時間が止まる。

「おーっ成功成功。もとに戻そう」

カチッ

シューン

時間が進みだす。

「おーっタンマウォッチが出来た！」

：

：

：

それから10分後：

アランが戻ってきた。

大きな袋を引っさげて。

「こんなにかつたのは久しぶりです！」

「そうか、品物をみして」

「はい、でもなににするんですか？」

「錬金のデザインだよこの世界のデザインってもんがあるだろ？」

「成る程、変に思われますもんね」

「そう言う事。見せて貰うよ」

…

…

装飾品は主に指輪やブレスレットになっていて、ブレスレットの場合石が皮膚に直接ついているため効力は高いがすぐに使いものにならなくなった。

指輪ははなれているのでその逆の効果だった。

「またつくつてみるか。もういいよアラン」

「そうですか、ではもうそろそろいきませんか？クエスト」

「そうだないくか！」

秀一達はクエストに出発した。

今回は特に短かったですねー

もっと長くしなきゃ（汗）

只今までの登場人物？装備？モンスター（前書き）

クエスト出発までの登場人物。これまた短い。

只今までの登場人物？装備？モンスター

尾崎秀一

14歳？男

神のミスで死に、ほとんど強制的に異世界転生させられた何とも不幸な男。

いまはアランと行動している。

とても背が低い。なのでチビとかお子様とかはタブー

装備

火炎剣

>ステータス<

属性

火？切断

切れ味

250 / 250

スキル（特性）

火耐性アップ？火属性魔法威力微量アップ

道具

タンマウオッチ

時間外を止める、しかし30秒まで。5回程使うと壊れる。

アラン

13歳？男

本名アルム＝アラン

奴隷商人に捕まりうられに連れていかれる所でモンスターに遭遇しておとりに使われ死にそうな所を秀一に助けられ仲間になる。いまはこの生活をエンジョイしている。なかなか活発な性格で裏は魔法を連発してあばれる魔法狂。

装備

電仁刀 でんじんとう

>ステータス<

属性

電気？切断

切れ味

300 / 300

スキル

スピードアップ？電気ダメージ半減？全電気威力アップ

魔法

エレクトリック？エレキボール

武器屋の店員

いつも強がり。秀一のタブーをいったため災難にあう。実は滅茶苦茶チキン（弱虫）

宿の女将さん

性格は優しくとても親切だが裏では怒りを表し調理器具で殴りまくる。とても少年が上手。

神

通称、チビ神。秀一を異世界に送った張本人。馬鹿にされると怒るがそれまでで、そんなに怒らない性格。実は下の位の神なのでそんなに世界を司っていない。また、信仰されても無い。その事でちょっと凹んでいたりする。ちなみに男。

モンスター

バラフ

きのこのモンスター。ざこいが毒をもっていて甘くみていると痛い目にあう。

ドロップアイテム

麻痺袋？毒袋？きのこの孢子？地魔石

ノツポ

木のモンスター、こちらは完全に弱く木の攻撃も全然いたくない。一応植物なので火で攻撃すると一発で燃え尽きる。

ドロップアイテム

苦甘い蜜？木の枝？木の皮？風魔石？木の葉？カイククの実？ムピ
ーの実？ハレツの実

ハラル

火を纏った巨大なムカデ。水をかけると火が消えてきて消えると死ぬ。打撃を与えるさいは水をつけないと火傷する。通称、火虫。
ドロップアイテム

火炎袋？火魔石？地魔石？火虫の皮

予定変更！！

…つと、クエストにいくまえに…

「ライトウイングに風魔石を錬金して…」

バチバチバチ！

> 風帯の翼が出来ました<

「鉄と火炎袋を錬金して…」と

バチィ！バチバチ！

> ターボブーツが出来ました<

「最後は銅と火炎袋で！」

バチバチバチィ！！

> ブロンズボムが出来ました<

…よし！

「アランーいくぞー」

「はい」

「あとはこれとこれ付けて」

「？これは緑色のライトウイングと…靴？」

「そう。そのライトウイングは改良版。前の2000倍は軽く飛べるだろう。靴はお楽しみ、だ」

「なる程、ではいきましょう！」

「ああ！」

二人は飛び上がり、羽を動かす。

「よし！こっからだ」

「？こっから？」

「まあ見てろつて、ポチツとな」

「ポチツと……………」

ポオオオオオオオオオオオ

ターボブーツが火を吹き始め…

ドツカアアアアアン！！

ジェット噴射を始めた。
ビュユウウウウ！！

その速さは音速を超える。

「……………！！」

「……………！！」

…そう、喋れないのである。（正確に言えば喋れるが聞こえないのだ）

1時間ぐらいして…

スピードを緩める。

「水辺が見えてきたしそろそろ降りるぞー」

「はい！」

…

「……………アクアドラゴン発見……………」

「降りてそこにドラゴンって…」

「やばすぎますね…」

そう、今二人はアクアドラゴンの前におりちゃたみたいで…

「グオオオオオオオオ！！」

雄叫びが挙がる。このままだと確実におだぶつだし目立つと騒がれたり固まられるし…まずは、

「喰らえ！ブロンズボム！」

そういつて秀一は爆弾を投げる。

ポオオオン！

あー…火力がたりなかったな…

めのまえには無傷のドラゴンがいた。

「うーん「少しのいて下さい…」ああ…」

後ろにいたのは気合いを溜めたアラン。

オーラが漂っているのはきのせいだろうか？

「エレクトリック」

剣に電気が蓄電され黄色くなる。

「電撃破！」

剣から無数電気の刃が飛ぶ！

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

刃は残らずドラゴンに当たっていたが…まだまだ無理か、ステータス見たけどHPがまだ4分の1もへってないな。！そうだ。

「アラン！ちよつと下がれ！全然弱ってない！」

「えええ！？わかりました！やつちゃってください！！」

「おお！ライトニングボルテックス！！」

ああーふらふらする。MPつかいすぎた。

そうおもっている合間に…

ビッシヤヤアアアン！！

ドラゴンの頭に雷が落ちる。

…ドラゴンの頭が焦げ始める。

「グオオオオオオオオ！！？」

ドラゴンがもがき始める。多分とまんないよー水がかからんうちはそうおもいながらドラゴンにちかずいてドラゴンの体に深い切れこみをいれ…ブロンズボムを入れて…

逃げるだけ。

「逃げるオオオオオオ！！」

ボカアアアアアアアアン！！

アクアドラゴン、爆死。ご合掌。

んでアラン、呆然。これどうにかならんかな…

結局そのあと質問攻めにあつたのは言うまでもない。

…

「よし！かえりましょう！」

「お前、よく考えろよ、普通往復最低4日掛かる所を1日で帰って見ろ、それこそ疑われる」

「なる程、ではどうするのですか？」

「1つは素材？アイテムの採取。あと1つが経験値を戦って上げる」
「わかりました…が今日はもうねましよう、日が暮れて来ましたし」

「そうだな、テントでも張るか」

「?どこにテントが?」

そのあと俺がなにもないところからテントを取り出してはって質問攻めにあつたのは言うまでもなくて…

予定変更！！（後書き）

これから定期的に錬金が入ります。次も錬金。

鍊金しよう！3

「よし、いまある材料はつと」

「何してるんですか？」

「材料の確認。鍊金しようと思って」

「鍊金ねえー、また見してくださいよ？」

「分かった分かった、いま始める」

ちなみに今ある材料

ミスリル×30

銅×3（ほとんど銅貨にしちゃった）

鉄×10

真つ直ぐな骨×20

パワーストーン×1

ディフェンスストーン×2

火魔石×4

風魔石×3

雷魔石×5

水魔石×6

巨大な水魔石×1

地魔石×3

光魔石×5

闇魔石×3

火炎袋×3

麻痺袋×2

水袋×3

氷結袋×2

石×20

大石×5

岩×1

…これほど。我ながら沢山拾ったな！。

「今回は俺の武器から！アランはちょっとまちなされ」

「はい、その代わりいいの作ってくださいよー！」

「分かった分かった」

とりあえず…

今回作るのは銃だ。ていうかこの世界にあるか？

「アラン、銃ってこの世界にある？」

「ありますが実戦に向かない物ばかりです」

なるほど、あるにはあるんだ。んじゃ、ハンドガンを少し改良したものを作ろうかな。

「んじゃ強い銃を」

「ここの最強銃の威力はノッポを2発位ですね、超せますか？」

「余裕！」

バチバチバチ！

>ドロームガンが出来ました<

できたのはもつところが緑色の拳銃。

「こんな形の銃はみたことありませんね…

すこしなにかに撃って貰えませんか？」

「すこしまて、ここの銃はどんなふうに撃つんだ？」

「うちの属性の魔力を込めてトリガーを引くだけですわ？」

「こっちはあらかじめ作った金属のたまを込めてトリガーを引くと

…」

パアアアアン！

テントに小さな穴が一瞬にしてできる。

「弾が出る」

「これじゃかわせない…」

「当たってみる？」

「…遠慮します」

「そつだよな、並の人なら心臓当たれば即死だしね」

「威力が違っ…」

「でも、これもつと強くなるよ？まずこれ最弱だし」
「これで最弱ですか…」

「そう、弾によって威力がちがうんだ。例えば…」

秀一は白い弾を銃に込め…トリガーを引く。

パン！

弾が打ち出される。

「これがどうしたんですk「目を閉じろ！」え！？」
気づくのが少し遅れたアランは目を閉じれなかった。
サーッ！

弾が破裂し、破裂したところから閃光がほと走る！

「うわああああ！？」

アランは閃光をまともに食らってしまったが。

閃光が消え…

暗闇にもどって、

「おい大丈夫かー」

「目があああー！目があああー！！！」

アランがムスカ大佐になった。

結局、アランの目が治ってから秀一は30分ほど説教をされたとい
う…

30分後…

「よし、続けよう」

「次はなにを？」

「うーんと装飾品かな」

「ああーなるほど」

「ここでチヨイスタイムー」

「おおー」

「このなかからどれか選んで」

そういつて秀一が出したのは骨と鉄と銅とミスリル。

「んじゃミスリル」

「遠慮ないなー」

「悪かったですね（怒）」

「サーセン、ではつき」

そっいつて次に出したのは各魔石。

「んじゃ、電魔石で」

「了解、では最後、どんなのがいい？」

「戦闘の時に邪魔にならなきゃなんでもいいです」

「んじゃ指輪ね、ちよいまち」

バチバチバチバチ！！

> 雷光の指輪が出来ました<

ステータスを見る。

> 雷光の指輪<

耐久：120 / 120

スキル：雷無効・雷攻撃威力1.5倍

魔法：サンダーボルト

無効！？強すぎた！！

「アラン…」

「はい？」

「雷無効って普通ある？」

「半減ならありますけど…無効はありませんよ？」

「これ…雷光の指輪っていうんだが…スキルに無効がついちゃってるの」

「え？」

「ちよつと来て」

そっいつてアランをテントの外に連れ出す。

「指輪付けて」

「はい？」

アランは指輪を付ける…とそのとき！

「アランよけるなよー！！」

錬金しよう！3（後書き）

魔力を込め始めて30分…

「あー、後頼みます！」

「了解！」

…

…

アラン魔力切れ、30分もいけば切れるわな。

…

1時間…

魔力がまだきれない。

…

2時間…

魔力2分の1、それでもおおすぎだろうこの魔力。

…

4時間…魔力が底をつく。

あ、やばい立てねえ。くらくらしてめまいがして吐き気がする。

「立てない…アラン、魔力石出来てる？」

「石が緑色になっています、成功してます！」

「そうか、んじゃねむらしていただくよ、魔力のつかいすぎで気持ち悪いし」

「分かりました。お休み」

「おやすみ」

そういつて俺は意識を手放した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2595w/>

異世界少年

2011年10月12日07時26分発行